日本の最果て知床

羅臼町地域おこし協力隊通信 9月号

千人踊り（知床開き）

羅臼町観光情報 CLICK http://www.rausu-shiretoko.com/

羅臼であいたい CLICK https://www.facebook.com/rausudeaitai

QUICK COLUMN

観光と地域づくりの関係

羅臼町は、斜里町と共に世界自然遺産知床登録１０周年を迎えた今年７月をピークに、注目の観光地としてテレビやラジオ、新聞などで沢山取り上げられました。実際に暮らし働いて羅臼を見ていると、全国有数の漁業地であること、ワールドクラスの野生動物観察が行えること、それらを見に来られた人たちが満足し、いつかまた来ようと思い、笑顔で帰ってくれているということがわかりました。日本中、世界中から、たくさんの人が訪れ、去っていく。日本の同規模の町村と比べると非常に珍しい光景です。

ところで日本では人口減少が問題になっています。地域おこし協力隊も、この問題に対する取り組みのひとつとして、総務省が全国区で行っている事業のひとつです。地域の居住者（定住人口）が減ると、経済を回す力が小さくなり、地域文化の存続も含めた、町を形作る力を衰えさせてしまうと言われています。最終的には、国や自治体という大きな仕組みをも危うくさせてしまうのではないかと言っている学者さんもいて（「地方消滅」増田寛也 2014 年）、「地方創生」という政府の新しいスローガンも生まれました。

人口というのは数に限りがありますので、あっちの町でもこっちの町でもなんて、思い通りに増やしたりはできません。この難しい問題の解決策のひとつになるかも…と注目されているのは、観光目的で町に訪れる人を増やすことです（ビジネス目的も広義の観光に含む）。端的に具体的な数字で見ると、こんな風に計算できるそう。

7/17「羅臼の海に感謝」

羅臼漁港周辺のごみ拾い

知床岬赤岩地区羅臼昆布エコツアー

市街地で現代の昆布漁の手法、知床岬先端地区で伝統の昆布漁について学ぶ

7/24 天然らうす昆布漁　解禁

7/1-3 羅臼神社例大祭

定住人口一人当たり 年間消費額 １２１万円	＝	外国人旅行者７人分 または 宿泊国内旅行者２６人分 または 日帰り国内旅行者７７人分

出典：観光庁「旅行動態調査」（平成２６年２月）

観光客の数を増やして、減った人たちの分まで補おうという作戦です。でも、観光客だって、無限にいる訳ではありません。どの観光地でもリピーター確保に努めています。羅臼の場合は、出会うことも難しいような野生動物をここでなら！と思って何度も足を運んでくれる方々がいるようです。

私も赴任から短期間で様々な観光体験（観光船、岬先端部や羅臼湖などでのトレッキング、卸市場や昆布倉庫見学 etc...）を行い、羅臼観光の魅力を知りました。わかったのは、羅臼の山や海、そして人々の生活と動物たちの関係を豊かに示す、ここならではの物語があるということ。そんな羅臼ワールドを語ってくれるのは、町に定住し自分のフィールドをこの町と決めた自然ガイドの方々はもちろん、言葉の荒い漁師だったり、町に普通に暮らしている人だったりしたのでした。それぞれの人が、それぞれの場所で、それぞれの言葉を使って、羅臼のことを伝えてくれる。そういう声の積み重ねが、羅臼を発信する大きな力となっていました。

町の人をときに悩ませもする動物達ですが、彼らと人とが交わることのない土地であれば、私たちが見ようと思って出かけていっても、動物たちは姿を見せてくれることがありません。羅臼では、動物の暮らしと人の暮らしが隣接しているからこそ、彼らを驚くほど簡単に見ることができる。これは大きな魅力です。

外の視点で見ると、羅臼はもはや観光地です。町の暮らしと自然を地元側から見せていくスタイルが羅臼で確立されつつあると思います。旅行代理店のような外からの目線ではなく、地元側で何を見せどこにお金を落としてもらうのかを考えていくことはもちろん、この流れを町をつくる原動力に…と思うのは欲ばりでしょうか。そんな新たな観光地のあり方を、羅臼でなら？（中村）